



夢  
境  
の  
花

本城美智子

夢  
境  
の  
花

本城美智子

集英社



夢境の花

一九九二年八月一〇日 第一刷発行

著者 本城美智子

発行者 若菜正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇  
郵便番号 一〇・一五〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

製作課 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1991 M. Honjou

Printed in Japan ISBN4-08-772806-4 C0093

夢  
境  
の  
花

わたしにとって不思議にたえないことが三つある、  
いや、四つあって、わたしには悟ることができない。  
すなわち空を飛ぶはげたかの道、

岩の上を這うへびの道、

海をはしる舟の道、

男の女にあり道がそれである。

——旧約聖書「箴言」第三十章十八節十九節

梯子だ鋸だと叫ぶ声、バタバタと乱れた草履の音が、井戸端で野菜を洗う彼の耳にも届いていた。だが彼はさつきからずっとそうしていたように野菜の上にかがんだまま手を動かしつつ、顔を上げようとはしなかった。晩春ののどかな光が、桶に溜めた水の表をまぶしく輝かせ、つややかに太った野菜を幸福そうに暖めている。木登り、木登りとはしゃぐ若い声を最後に、あたりは再び静まり返って、高い梢でさええる鳥の声ばかりになった。翅の黄色い蝶が一匹、水を慕って、桶の端にしばらく停まり、それからまたふわふわとおぼつかない飛び方で、庭木のほうへと去っていった。うつむけていた顔をようやくあげた彼は、太陽の位置を確かめるように目を細め上空をふりあいだ。

前日、消防署の人間と名のるカーキ色の作業衣姿の男たちが寺の中を巡回しに来た時、彼は庫裡で拭き掃除をしていた。火の元を調べる三人の男のうち、年齢も地位もいちばん高そうな一人が、薪で飯炊きとはね、あんたらいつまでこんなことやってられるってもん

でもないでしょうにと、あきれているというよりむしろ苦々しさをこめて言うのを聞いた。人間が宇宙を旅しようって時代ですがねえ、二十一世紀まであと何年もないっていうのにこの暮らしぶりとは、もっとも大地震が起きてガスも電気も水道も止まったって、あんたら生き残っていられるかもしれないけど、と皮肉まじりの言葉を投げられて、核爆弾が落とされればみんな同じでしょうが、と典座役は負けていなかった。入口近くにいた彼を最後にじろじろと眺め、火の取り扱いにはくれぐれも気をつけるようにね、君もだよ、わかるね、と一句一句切るように言って出て行ったのは、西洋人と誤解されやすい容貌のせいだろうと察しはついたが、三人の無遠慮な視線には、寺の中で古めかしい生活をしている修行僧を胡散臭く思う気持ち露骨にあらわれていた。巡回後その男たちから、電線に接触する木の枝を始末するよう勧告されたと聞く。木登りだの鋸だのと言ったのは、その枝下ろしの作業のことにちがいない。電線に触れている枝といえ、散り終わったサクラか、今が盛りのカイドウだろうと見当はつくが、彼のいる場所からはようすを窺うことはできなかった。濃い紅色の蕾が開花とともに桃色に溶けるカイドウの華やぎ。その花盛りの枝の中にもぐりこめたらどんなに素晴らしい気分だろうかとひとりでにそちらに動きかける心を押さえつけるために彼は仕事に熱中しようとした。自分をその作業に加えてほしいと願ひ出ることとはできないし、願ったところで許されるわけもない。すべて指示どおりに動くしかない身だ。『佗は是れ吾にあらず』、自分のなすべきことを完うせよとの教えは、今

は彼を井戸端から離してくれない。しかたない、諦めるしかないと小さく溜め息をもらしたその時、不意に庫裡の中から呼ばれて返事をかえた。

学智、そこはそのままでもいいから、おまえも枝下ろしを手伝ってこい。若くて身軽だからって、あんな新米ばかりじゃどうせろくなことやらんだろう。木を丸坊主にしてからじゃ遅い。おまえにくつつきまわってるあの粗忽者のちびに氣をつけてやれ。

声の主の典座役は、それだけ言うと、かまどの方に向き直っていた。有無を言わせぬ命令者はもう返事の声を確かめる耳だけになっている。

そうら、目の色が違ってるよ、こんな日は外の仕事のほうが楽しいよね、早く行つておいで。

ひやかすような笑いをうかべた副典ふくでんが片手を振つてうながしてくれた。彼は大きな返事をして、井戸端を急いで片づけ、濡れた手を拭くのもどかしく中庭を走り出た。

太い電柱は、山門わきから寺の奥へむかつて境内を横切つて立ち並び、その電柱を結んで電線が青空に幾本も黒い筋を引いている。のびのびと育つ樹木の高さに比べて、電柱はいかにも低く、梢が電線に触れるのも無理はない。伸びる枝が悪いのでなく、伸びない電柱がいけないのだと奇妙な理屈に顔がほころんだ。境内のゆるい坂を下ると、山門近くの丈高い樹木の下に四つの姿が動いているのが見えた。手伝いに回されたと告げる声が少しうわずつた。サクラの木に立てかけた梯子には、すでに若者がとりついている。ちやうど

いいところに來たな、それならおまえは玄洋と組んであっちだと侍者役からカイドウの方をわりあてられ、声高な返事が口をついた。遊びながらやるんじゃないぞと語氣を強めていい残し、急用のできた侍者役が姿を消すと、さすがに一団の空氣がゆるんだ。枝切りは自分がするからと新參の若者に梯子を支えさせて、カイドウの下に立てかけた梯子に登った。一方のサクラの木では、もうひとりの若者が、幹によじのぼって鋸を引いていた。少し前に白っぽい花びらをさかんに散らしたヤマザクラは、すでにやわらかな葉のそよぎばかりになって、ようやく彼も穩やかに眺めることができた。サクラを愛好する氣持ちはおそらく一生持てないだろうと思うと、美しい季節の一部を失うようで残念だったが、生母の死にまつわるその花だけは散り果てるまで氣が滅入る。

いらかのなあみいと、とサクラの枝にのつた若者が歌い出して、見れば幹に抱きついて、はるかかなたを望む目つき。一月半ばかり前に入門してきたその若者の振る舞いは、何かにつけて古參を仰天させることばかりで、先刻、典座役が粗忽といったのもあながち皮肉や嫌味とはいえない。

歌うな、英哲、こら、と梯子の下にいる男が叱声をとばすが、怒氣を含まぬ口調のせい  
か、歌声はさらに続く。

うるせえぞ、さっさと働け。

今度はいくらか強い調子に変わって、若者は歌いやんだ。

だって鯉のぼりが見えるんですよ。すごいや、二十匹ぐらい連なってる。あんなの見るのは初めてだ。ぼくのなんかたった三匹だったもの。

おたまじゃくしが三匹だろう、とまぜっかえす声に、どつと笑いがわいた。みごとに鯉のぼりを五月晴れの空に飾っているのは海岸に近い家々。残念ながら薨ではなく現代風のトタンかスレートぶきが多いが、緑の山がゆるやかに海になだれ落ち、岬をいくつも海につきだしながら大きくまわりこんで湾をつくっている地形と鏡の表のように輝く海を遠景にして、田舎らしい賑やかな鯉のぼりの眺めは壮観だった。彼自身は鯉のぼりを飾ってもらった記憶はないが、改めて考えれば寺に鯉のぼりというのは奇妙な気がしないでもない。ねえ、学智さん、五月五日には柏餅を食べさせてもらえるんでしょうか？

さあ、どうかな、寺にはそんな習慣ないから。

典座さんにたのんで下さい。お願いします。ぼく、柏餅が大、大、大好きなんです。贅沢は言いません、一個でいいですから。

英哲は何考えてるんだア。寺に子供の日なんかあるわけねえだろ。ゴールデンウィークも何もありやしねえぞ、年がら年中坐禅なんだ、わかったか、このくそガキ。

賢明さん、木を揺らさないでよ。

サルも木から落ちるのかい。下でからかう男は口は悪いが悪気のない証拠に梯子に寄りかかって大きな欠伸あくびをしている。前年に彼と時を同じくして上山してきた賢明は、どやし

つける後輩ができてうれしらしい。年齢は彼と同じ、大学卒業後にアメリカやアフリカの大地をオートバイで横断した経験を持ち、みるからに屈強そうなその男は、牛のように眠り、牛のように食い、何事も行動からしか学ばない性格だった。粗野だが気はいい。長兄、次兄が坊主をきらって自分にお鉢が回ってきただけとは言うものの、放浪の果ての僧堂入りは彼の決めた人生であるらしい。当初から乱雑な言動に叱声をかけても、平然と意に介せず、反抗期の少年がそのまま大人になったようどこか憎めない。いちばん近い存在ながら、違いばかり際立つその向こう意気の強い同輩に、この一年余助けられたことは少なくなかった。

ねえ、学智さあん。

哀訴の表情が今度は何を口にするのかと思えば、魚が食べたいと甘えた声を出した。

鯉のぼりがおいしそうに見えてきちゃった。お刺身なんて贅沢言いませんから、干物でもしらす干しでもいいから食べられませんかあ？

おい、こら、おたまじゃくし、涎を垂らすな、学智に泣きついたって食えやしねえぞ。

しらす干しが食べたいな、と若者は節をつけて小さな声で歌いはじめた。都会の、それも下町の寺で育ったこの若者は、生来のやんちゃらしく、箸にも棒にもかからぬとあきれられながらも、人を魅きつけずにおかない愛嬌がある。しらす干しは一度にたくさんを命を飲みこむから罪が重いよと、屁理屈のような理屈で彼が言いかせたら、ようやく了解

したのか、ああ、そうですね、ぼく今までたくさんかわいそうなことしたんだなあとうなずいて、歌はそれきり止んだ。叶わぬことはさっぱりとあきらめるしかない。彼の下で梯子を支えるもう一人の新顔は、無口でひかえめな玄洋。すぐに上気して赤らむ頼が純朴そうなのに青年は暇さえあればノートに向かって何やら書いている。たずねてみたら、寺を継ぐために坊主になる覚悟はあるのだが、本当は小説家になりたいのだと恥ずかしそうに白状した。活字に飢えていると言ったこの青年なら、しらす干しの替わりに世俗の読み物を所望するだろうが、それもまた叶わぬ願いだ。

厳しい規律の中にはめてみれば、誰でも多少はみだし人間に見える寺の生活だが、ひとたび集団行動に移れば一糸乱れず事が運ぶ。個性の強さはおしためられても卑屈にはならず、かえって個が孤であることをきわだたせる環境に、おのずと和が生じ礼が生まれる。これほど見事な社会はめったにあるものではないと感じ入るごとに、そこに身をおく好運を彼はしみじみかみしめる。そのうえ寺には、自然の美しい景観があり、なかでも彼の好きな植物が豊富にあった。樹木あり、園芸草花あり、野草あり。可憐でも豪奢でも清楚でも咲き匂う花のそばに身をおいていられるなら、他には格別欲しいものもない彼だ。大学では植物学を専攻し、僧侶になるよりは植物研究でもしていたかったが、一人息子には必然的に跡継ぎの命運が待ちうけ、仏教を学び修行に出る日々を避けては生きられないと覚悟は早々に固まっていた。生家は都会の郊外でわずかな檀家をかかえる菩提寺、由緒来歴

は立派でもさびれた古寺で、住職の父親は寺の用向きのかたわら、近くの女子大学で講師も務めるほどだから暇な寺だ。その生家を後にしたのがおよそ一年前。彼の父やそれまでの師であつた人が、修行僧三十人足らずの、その片田舎の修行寺へ彼を預けたのは都会の喧噪から遠い地で、身を入れた厳しい修行生活を送らせようという眼目があつたためだろう。彼もそれに異議はなかつた。初めて寺を訪れたのは、三月下旬の寒の戻りという小雪のちらついた日だったが、樹々の枝先の芽吹きが伝わってくるような山の中腹で、自然の佳景にすっぱり包まれた寺は、端正を越える森厳とした美の世界へ彼を迎え入れてくれた。地上の天国、極楽浄土と見まごう美しさだった。けれども、その美しさに彼はさっそく一抹の危惧を覚えた。それは修行の場というものに對して、彼が抱いていた観念と大きくくい違つていたからだ。西洋の修道院の多くはあえてむきだしの岩山のような厳しい土地に建てられるという。ユダヤの一神教が成立したのはイスラエルの岩と砂漠の土地だ、イエス・キリストが修道生活を送つたとされる死海ほとりのクムランもまた過酷な地だ。仏陀が法華經を説いたという靈鷲山<sup>りやうじゆせん</sup>にしても岩だらけのはげ山だと聞く。自然と人間が敵対する風土、命を脅かし健康を損わせ、心を荒ませる荒野の恐ろしさがそこにはあるが、しかし、そういう所だからこそ、人間の魂が試され、鍛えられるのではないかと考えていた彼は、自分の修行の場も殺風景で荒寥とした場所であつてほしいと思つていたのである。豊かな自然の景観とそこに溶けこむ伽藍の落ちつき、自然と人為の共存、枯淡が美の快楽

と慰安をもたらす禅宗寺院。一切衆生いっさいしゅじょう悉有しついう仏性ぶつしょうの境地を突き抜けて草木国土そうもくこくど悉皆しつがい成仏じやうぶつとまで達するには、日本の恵まれた風土が何より必要だったろうが、草木はおろか国土さえなかったイスラエルの民に日本のこの禅寺は何と映ることか。こんなに快い環境で魂がざりざりまで追いつめられることがあるのだろうか、と懸念は一年余を経た今も消えていない。修行は決して生易しいものではなかったが、花の眺め、野鳥の声の慰めはいつも充分なほど深かった。彼にとっては、宗教的な陶醉よりも、むしろ山門のむこうのすりへった石段わきに群れるシャガの花を夕冷えに眺めるほうがはるかに至福の瞬間なのだった。おまえら、いつまでも枝切って遊んでるんじゃない、早く掃除をせんかい。

大声の叱声は戻ってきた侍者役。あわてて木の幹づたいにおりた粗忽の若者は、黒々した土の上にしりもちをつき、全員の失笑を買った。侍者役が近づいてきて彼の袖を引いた。花はおまえが適当にかたづけろ。ただし、飯の中に混ぜるんじゃないぞ。いいな。彼は美しい花房のついたカイドウの枝をあわててかき集めはじめた。

## 二

『フラワーショップちぐさ』は、駅の向かいにある大型スーパーマーケットの一角にあつ

て、西日が少しまぶしいことを除けばまずまずの立地条件だった。

二年前、都会から大型スーパーマーケットが進出してきた時、かおるの兄がいちはやく目をつけ、それまで町になかったような小奇麗で洒落た花屋を開こうと言い出して出来上がったのがその店だった。そして店の責任者に妹のかおるを据えたというわけだ。駅の近くで通勤通学者の目もあり、買物客も集まるとなれば、売り上げは当初の予想を上回る好成绩で、これには兄に劣らずかおるも気を良くしたが、とはいえ経営全般を本店にたよらざるをえない状況では、かおるには不満が残った。商店街を二百メートルほど歩いた先にある本店は、兄を中心として兄嫁や従業員、それにかおるの母親も加わって、市場での買付けから花の水揚げ、華道教室や会社、飲食店への配達、慶弔用盛花の調製、それに集金や営業、店の経理まで一切の仕事をこなしている。かおるも以前は兄を助けて本店の仕事全般に通じていたものだが、新しい店では、花はすべて売るばかりの状態になって届けられてしまうから、もっぱら客相手をしていればよく、売り上げが多少悪かったとしても、本店がうまく調整して花を動かせばさほど影響もないのだった。むしろ駅前という目立つ場所に花を並べて道ゆく人に見てもらうだけで店名の宣伝になるだろうし、兄にとっては急死した父親の跡を継いで商売に入って以来、支店を出したということが何より自慢なのだった。ここはおまえの店だと、事あるごとに兄から言われるにせよ、かおるの気持ちはもうひとつ釈然としない。

いつものように九時半に店を開け、アルバイトの主婦が店の前に鉢物や廉売の花束を並べたり掃除をしている間に、かおるは注文された花束や籠盛アジシを作り始めた。ゴールデンウィークが終われば一年でいちばん忙しい母の日が待っている。働くことは嫌いではないが、それでも時々ふと空しさが心におしよせてくるのは、働きがいのない店への不満ばかりではなくて、人生そのものに飽きかけているせいだろうかと思う。まだ二十二だというのに、自分自身をすっかり使い果してしまつたような感じがする。こんな貧相な田舎町でいつまでもくすぶっているのがいけないのだろう、いつそこかへ出て行つてしまおうかと考える。が、計画すら立てない前に挫折する。あの時に出ていってしまえばよかったと悔やむきつかけが過去に何度かあったのに、本当のところは田舎町がいやなのでも花屋の店がいやなのでもなく、自分の人生そのものがいやなのだから、どこへ行つても同じことだろうと諦めが先に立つて実行できなかつたのだ。それに、家を出ていけば兄嫁が喜ぶとわかつてゐる。誰よりも慕っていた兄を奪い、店での役割まで奪つた義姉。その義姉の思う壺にはまるのは何よりも悔しかつた。

十時すぎに本店の大型ワゴン車が停まつて、運転席から兄が降りてきた。ほとんど毎日、その頃には兄か従業員の大介のどちらかが顔をみせて、花の搬入や配達品の受け渡し、注文の確認などを短時間にすませて帰るのだが、それによつてその日の店の空気が整つた。自分の店という自負を強く意識できる時間だつたし、義姉の姿のない所で兄とむかいあえ

るこの時間が、かおるは好きだった。けれどもその日は違っていた。かおるの頭からは、朝方台所で仲よく将来の夢を語りあっていた兄と義姉の姿が離れなかった。咲きすぎて売り物にならなくなった薄桃色のストックを飾ったテーブル、母親になりたい義姉と、父親になりたい兄との話題はどうせ未来の子供のことだろうと思っただかおるが聞いたのは、フラワーデザイナーの資格を取らせるためにかおるをどこかに勉強に行かせようという計画だった。立ち聞きの耳には、それは家からの追い出しとしか聞こえなかった。

大型ワゴン車の荷台からは、カーネーションの束が次々運びこまれた。赤、ピンク、白、クリーム色、それにブルーまである。一輪咲き、スプレー咲きと種類も数も多い。主婦が花桶にいくつも水を満たし、延命剤を少量注ぎこんでから、花を束ねたままつつこんで、冷蔵庫の中へ手際よく納めていく。気がひきしまりますねえ、とかおるの兄に愛想のよい受け答えをしている。

もつと持ってきてよ。それだけじゃちつとも目立たないわ。

種類にも量にも不足はなかったが、かおるは言わずにいられなかった。

これだけあれば充分だろう。足りなくなったらいつでも本店のをまわしてやるから。

ここは私の店なんでしょう、私のしたいようにさせてくれるんじゃないの？

おまえ何をすねてるんだと頭をなでる兄の手を無言で払いのけた。察しのよすぎる主婦は、ほうきを持ってそそくさと店の外へ出ていってしまう。